豐かさ再考

一二三朋子

「繩文時代、狩獵採集社會なり。常に食料確保に苦勞し、食べ物を求め放浪し、食料を奪ひ合ふ。彌生時代、農耕始まり、食料安定し、定住可能となり、生活飛躍的に発展し、文明化も始まりぬ」。これ、古代に関する通説ならむ。

なれど、近年の研究により、繩文時代なむ、豐かにして平和なる時代なりしこと、明らかとなりつつあり。

第一に、多様にして豐富なる食生活なりき。肉、魚、貝、木の實など滿遍なく攝取せり。食料のおよそ七割は木の實などの採集により支へらる。かつ、土器により煮炊きなどの調理も行ひ、團栗などのあく抜きなどもしき。旬の味覺を樂しみきともいふ。また、自然の木の實及び果實、多品種なれば、一種類、不作なるとも、他のものを捕食することを得。

一方、農業による作物、單一ないし少品種なれば、旱魃、水害、風害、病害、蟲害などによる被害あらば、忽ちにして飢饉に瀕す。

第二に、餘暇の豐かさなり。一日の勞働時間、午前中の四時間ほどなり。午前中、男たちは狩獵、女たちは採集の他、土器及び土偶の制作、漁網及び衣服の裁縫など、手仕事に勤しみき。

勞働は午前中のみにて、午後なむ、自由時間なる。道具の手入れ、石及び貝などの裝身具作成、土偶の彫刻、晝寢、祈り、會話などを樂しみけり。

農耕により、逆に、人々の勞働時間、增加せり。土地を耕す、種や稻を植う、灌漑施設を整ふ、雜草を採る、害蟲を驅除す、病害と鬪ふ、收穫す、加工し保存す。いづれの作業も重勞働ならずや。

第三に、私有觀念の希薄さなり。山、森、川、海より得らるるもの、全て「神よりの恵み」なれば、皆で分かち合ふこと、當然なり。持つ者は持たざる者に與ふる贈與經濟にて、等價交換の仕組みにて説明することすら困難なりといふ。

私有觀念の始まりは、農耕にあり。農耕により得らるる食料は「生產物」なれば、土地も生產物も「自分のもの」として圍ひ込み、貧富の差、權力の差、階級の差、國家の誕生となむ擴大しぬる。やがては、土地や作物、勞働力（人間）を巡る爭ひへと發展せり。

繩文時代の豐かさに鑑みるとき、そこに立ち戻るは不可能なれど、現代の我々の生活、果して眞に豐かなりや。

（令和八年五月二十六日受附）